

事件2 「バスカヴィル家の魔物」

1

「……マスコミは相変わらずだな。人が死んでいるというのに、事件の度にお祭り騒ぎだ」
そう言って、コナン・ワトソンはテーブルの上に今朝の《ストランド・ニュース》を投げ出した。

一面の記事は、二日前にまたしても現れた《ジャック・ザ・ナイトメア》の犯行についてだ。例によって刃物に因る通り魔的殺害で、現場には仮面も残されていたらしい。しかも、今回は頭部が首から切断されていたようで、その派手な外傷も話題になっていた。

今度の被害者は政治運動に関わる市民団体の一員だったらしい。おかげで、《ジャック・ザ・ナイトメア》の正体は神聖ブリタニア帝国の放った作業員ではないかと言う、突拍子もない論説をぶち上げる新聞まであった。要するに、巷を騒がす殺人鬼のネタであれば、なんだって構わないのだ。

とはいえ、来年は革命暦一〇〇年という節目の年であり、様々な祭典が企画されている。人々の耳目を集めるという意味では、狙い所は悪くないのかもしれない。

「そう言う君も、クロエ・ノートンの件では、匿名でマリーの取材に応じてたじゃないか」

「四六時中付きまとわれて、根掘り葉掘り聞かれただけだ。それに、俺は事実しか話してないぞ。あいつが派手に脚色してるんだ」

「ふむ。まあ、いつものことか」

気のない声で応えて、アーサー・ホームズは手元の作業に意識を戻した。

ベーカー街222B。

リビングに居るのは、コナンとアーサーの二人だけだ。コナンはさつき大学から戻ったところ。アーサーは暖炉——を改造した、彼曰く《電気炉》の前に陣取り、何やら作業に没頭していた。

くわえ煙草のアーサーの前にあるのは、車輪が前後についた自転車と思しき物体。それが上下ひっくり返して置かれ、コードで《電気炉》に繋がっている。

正直、あまり聞きたくはなかったのだが、

「……今度はなんだ？ 何を作っている？」

「よくぞ聞いてくれた！」

作業の手は休めないまま、待ってましたとばかりにアーサーが返事をする。

くわえた煙草をひよこひよこ動かしながら、

「だが、いきなり答えを教えるのもつまらない。まずは君の予想を言ってみたまえ、コナン」
「……電気式自転車」

「正解！ なんと、冴えてるな？ これはまさに電気で動く電動自転車だ！ 実を言うと、神聖ブリタニア帝国の貴族連中の間では、この程度の物、すでに珍しくはない。ブリタニアは電気技術、特にサクラダイト研究において、他国を一步も二歩もリードしているからな。だが、こいつは決して、向こうの製品にも負けてはいないぞ？ 小型化はむろんのこと、とにかく馬力の増強にー」

「わかった。わかったから、説明はもういい」

「名付けて《Eバイク》！」

「だから、もういいって！」

やはり聞くのではなかった。とはいえ、聞かなければ聞かないで、いつ予想外の被害を被るか知れたものではない。

話題を変えるべく、コナンは視線をテーブルの新聞に戻す。

「結局、ウィリアムからはろくな証言が引き出せなかったらしいな」

結局、コナンたちが関わったクロエ・ノートン殺害事件は、《ジャック・ザ・ナイトメア》の犯行ではなかった。ただ、その模倣犯ということで、センサーショナルに報じられた。《ジャック・ザ・ナイトメア》の模倣犯はこれまでいなかったー少なくとも判明はしていないーだけに、それはそれで話題になったのだ。

だが、話題になったのも数日のことで、新たな被害者が出てからは、急速に人々の記憶から風化していった。裁判は続いているはずだが、その結果に注目している者など、ロンドンでも数えるほどだろう。

「どうも精神状態がおかしいそうだ。クロエ・ノートンの殺害方法や動機こそ白状したが、他は支離滅裂だって、レストレード警部がぼやいてたよ」

コナンが話を投げると、「ん、ああ」とアーサーもスパナを片手に生返事をした。

「……案の定、手紙もなかったしな」

アーサーの言う手紙というのは、アイリーンから依頼された、彼女の手紙だ。実際、ウィリアムの宝石店に残されていたのは、彼と被害者の間でやり取りされた物だけで、アイリーンの手紙は一通も見つからなかった。

そして、替わりに残されていたのが、例の割れた仮面だ。

「あの仮面……本物だったとすれば、一体どういうことになるんだ？ 新たな犠牲者が出た以上、ウィリアムが《ジャック》だったはずがない。だが、だとすれば彼はどうやって本物の仮面を手に入れた？ それに、本物の仮面が手元にあったなら、なぜクロエ・ノートンの殺害時

には、あえて偽物の仮面を残したんだ？」

「あえて何も……ウィリアムは、本物の仮面なんて知らないさ。賭けても良いが、自分の秘密の隠し場所にあの仮面があるだなんて、夢にも思ってたはずだ」

「だ、だが……ウィリアムじゃないとすれば、『ジャック・ザ・ナイトメア』本人の仕業だともいうのか？ やつは無差別殺人を起こすような殺人鬼だぞ？ どうしてそんなことを……」

『『あるべき物』がなく、替わりに『ジャック・ザ・ナイトメア』の仮面があった。シンプルに考えれば、理由はひとつだ』

アーサーの台詞に、コナンは唾を飲む。

「……『ジャック・ザ・ナイトメア』がアイリーン嬢の手紙を奪って行ったと言うのか？

ど……どうして？」

コナンの問いかけに、「まさしく」とアーサーは答える。

「どうして『ジャック』はアイリーン嬢の手紙を奪っていったのか。また、どうして『ジャック』は仮面を残したのか。興味は尽きないが、さすがに推理ではなく創作的想像の範疇だ。いまはまだマリー辺りに任せる段階だな。ただ……一点、注意すべき事がある」

「なんだ？」

尋ねるコナンに、アーサーはスパナを弄ぶように回転させながら、冷たい印象の眼差しを向けた。

「仮面は割られていた。多少の衝撃で偶然割れるほど柔な作りじゃなかったからな。つまり、故意に割った上で残したんだ。さて、これは何を意味するのか……」

煙草をくわえるアーサーの口元に、淡い冷笑が浮かんで消えた。彼が、残された「謎」を楽しんでいるのか、それとも苛立っているのか、コナンには判断できなかった。

部屋がノックされたのは、そのときだ。

「アーサーくん、コナンお兄ちゃん、いる？ ちょっと相談したいことがあるんだけど」

ドア越しの声が告げる。やや舌足らずな幼い声だ。

二人は互いの顔を見合わせた。

*

部屋を訪れたのはハドソン家三姉妹の三女、サラ・ハドソンだった。歳は十一。マリーとは七つ違いになる。可愛らしいブラウスとスカート姿で、上の姉を真似てエプロンを着けており、下の姉に似た澁刺とした瞳をしていた。

また、サラは同年代の少女を一人連れていた。こちらは、見るからに「良家の子女」といっ

た風だ。

手の込んだワンピースは古いが上等の物で、ふとした仕草にも親の躰の成果が見て取れる。ただ、初めての場所、しかも見知らぬ大人の男二人を前にして、かなり緊張している。

「は、初めまして……ローラ・ステイプルトンです」

と、小さく小さく名乗ったあとは、半ばサラの後ろに隠れてしまった。

自分が敵めしい顔つきをしていることは、コナンも自覚している。助力を請うべくアーサーの様子をうかがったがアーサー予想通りアーサー小さなレディーに相応しい対応が期待できる予感は無かった。新しい煙草を吸わずにいるのが、せめてもの対応だろう。なので、努力してこやかな笑みを浮かべながら、二人の少女に椅子を勧めた。

自分とアーサーの自己紹介を簡潔に済ませてから、

「それで、サラ？ 相談しているのはなんだい？」

「うん。あのね。この子のお父さんを探してほしいの」

「お父さんを？」

コナンが聞き返すと、サラは元気よく頷いた。

「ローラのお父さん、何日か前から家に帰ってきてないそうなの。ローラのお姉さんは心配しなくていいって言ってるそうんだけど、ローラは心配してるの。それで、私が相談に乗ってあげてるのよ」

サラの説明に、「なるほど」とコナン。

マリーに聞いたことがあるが、サラは歳のわりに面倒見が良く、この界限の子供たちの相談役なのだそう。もっとも、相談の多くはいつも家にいる姉のターナやアーサー今回のようにアーサーいつも部屋に籠もっているアーサーの元に持ち込まれるわけなのだが。

「わかった。……けど、お姉さんは心配ないって言ってるんだよね？ お姉さんはいくつだい？」

サラが顔を向けると、ローラはまた小さく頷いた。

「十六です」

ローラの回答に、ふむ、とコナン。大人の判断ができるアーサーとは言い切れない微妙な年齢だ。

「失礼だけど、お母さんは？」

「ローラはお母さん死んじゃってないの。家にはお手伝いさんが何人かいるけど、その人たちに相談しても真面目に聞いてもらえないんだって」

使用人が複数ということは、やはり良い所のお嬢さんのようだ。そんな家の主人が数日でも行方不明になれば、周りの大人たちも、もっと騒いでいるはずである。とすると、やはり少女の早とちりと考えるのが妥当だろう。

ただ、

「……うちには夜、魔物が出るんです」

小さな声で、ローラが言った。幼い顔は真剣そのものだ。

ピクツ、とアーサーがわずかな反応を示した。アーサーが、コナンは気付かなかった。

「ま、魔物がかい？」

「はい。あの……うちには昔、魔物が住んでたんです。あ、私が生まれるより前の話なんですけど、うちにいるお年寄りの人なら、みんな知ってます。『ステイプルトンの家には、魔物が出る』って」

「な、なるほど」

「でも、それはあくまで昔話で……ずっと長い間、誰もその魔物を見たことはなかったんです。それが、いまの家に引っ越してからしばらくして、その魔物がまた出るようになって……」

「……ほお」

「嘘じゃありません！ 私も、見たんです。夜中に窓の外に、魔物の影が映るのを。私だけじゃなくて、他にも何人も見てるんです！」

そう言うと、ローラは悲しげな顔で、ぎゅっと膝の上の拳を握り締めた。

「それで、お父様に魔物のことを言ったら、大丈夫だって。お父様がなんとかするから……でも、お父様、居なくなっちゃって……」

「……な、なるほど……そうか」

コナンは生返事をしたが、少女はろくに聞いていなかった。うっ、とすすり泣く少女を前に、為す術もない。「大丈夫だから」と肩を撫でて慰めるサラの方が、遙かに頼もしかった。

救いを求めてアーサーに顔を向けたが、アーサー予想通り、相棒は電動自転車にかかりきりだ。コナンは全身を強張らせた。取るべき態度を決めかねた。

だが、幸い、力強い援軍が現れた。

「アーサーさん？ コナンさん？ 紅茶をお持ちしましたよ」

ドア越しに告げるターナの声に、コナンはこれ幸いと走り寄ってドアを開けた。トレイにポットとカップを載せたターナが、ニコニコと部屋に入ってくる。

「あら。あなたがサラの新しいお友達？ 初めまして。サラの姉のターナです」

「あ、は、初めまして。ローラ・ステイプルトンです」

ローラが椅子から降りて挨拶すると、「あらあらご丁寧」とターナは笑いながらトレイをテーブルに置いた。

「ステイプルトンさんのところのお嬢さんなの？ じゃあ、きつと下の娘さんね。お会いできて嬉しいわ」

「ステイプルトン氏をご存じなんですか？」

にこやかに微笑むターナは、コナンの問いに「ええ」と答えた。

「二人は知らないかしら？ リージェンツ・パークの側に、ずっと空き家になってたお屋敷があったでしょ？ あそこに……去年の暮れ頃だったかしら？ 引っ越して来られたのよ」

「……私たちのこと、知ってーああ、えっと、ご存じだったんですか？」

「ふふ。いいのよ、畏まらなくて？ それに、ご存じって程じゃないわ。私も、ご当主のステイプルトンさんのことは、街で見かけたことがあるだけだから。あまり表には出てられない方みたいね。それで、かえってこの辺りでは、噂になっていたのよ」

カップに紅茶を注ぎながら、ターナが答える。

「噂というと？」

「それは……一体どんな方が引っ越していらしたのかしらって。海外とやり取りされてる資産家の方らしいけど、近所では誰も直接会ってお話した人がいないものだから」

ターナは、ちらっとローラを見ながら、コナンの質問に答えた。コナンも察して、それ以上は聞かなかった。

おそらく、素性の知れない新たな住人が、近辺で話題になっていたのだろう。あまり、好意的な意味合いではなく。

しかし、

「あのね、お姉ちゃん。実はー」

サラがローラの相談話を話すと、ターナは「まあ」と幼い少女に同情する表情を浮かべた。

面倒見の良さで言えば、ターナは妹のサラ以上だ。

アーサーに顔を向け、

「アーサーさん？ ローラさんの相談に乗ってあげられない？ このままじゃローラさんが不安に思うのも無理はないわ」

ターナに続いてコナンも相棒を注視する。すると、三姉妹の長女の台詞に、アーサーはため息を吐いて手を止めた。

正直、アーサーが依頼を受ける可能性は低いと思っていた。自らが子供っぽいせいか、アーサーは子供が嫌いだ。理屈の通じない「生き物」は苦手だと、普段から公言している。また、良家の子女とはいえ、さすがにこの依頼で報酬を得るのも難しいーというより、非常識だろう。

実際、こちらを振り向いたアーサーは、いかにも面倒そうな顔をしていた。

ただ、

「あー……ミス・ローラ・ステイプルトン。君が魔物を見たというのは、本当なんだろうね？」

「え？ は、はいっ。嘘じゃありません！ 私、確かに見ました！」

「どんな姿だったか、正確に言えるかね？ 角は生えていた？ 翼やしっぽは？ 大きさはどれぐらいだ。言ってみたまえ」

「え、ええと……大きさはわかりません。私が見たのは、影だけだったから。でも、角はありません！ 額から斜めに二本。けど、翼はなかったはず。肩が変な形に盛り上がってましたけど、翼のような物はありませんでした。しっぽは……どうだろう。あったかもしれないし、なかったかも……」

真剣に答えるローラに、コナンは「おい、アーサー」と咎めるように口を挟んだ。相棒が彼女をからかっていると思ったのだ。

しかし、アーサーは冷静だった。「……ふん」と鼻を鳴らすと、電動自転車の前から立ち上がった。

「昔話の魔物、ね。まあ、殺伐とした連続殺人犯よりは、まだしも浪漫があるか」

「アーサー。じゃあ？」

「思いの外まともな『証言』だ。少なくとも、その子が『何か』を見たのは間違いなさそうだし……」

改めて確認するコナンに、アーサーは諦めるように言って、肩を竦めた。

「とりあえず、その子の家を訪ねてみるでしょう。大家の孫どもの機嫌は、取っておくに越したこともあるまいさ」

*